

大阪市立自然科学博物館館報

4

大阪市西区靱2丁目52

大阪市立自然科学博物館

目 次

公害・自然保護・自然史博物館	1
I 庶務報告	3
II 収集保管事業	7
III 調査研究事業	11
IV 展覽事業	13
V 普及指導事業	15
VI 新館建設事業	18

公害・自然保護・自然史博物館

館 長 千 地 万 造

今日の巨大な産業社会の発展の中で、自然環境が急激に破壊され、各種の公害がわれわれの生活をおびやかしている。自然の大切さが、いまほど身にしみて感じられるときはない。

日本人は古来、自然を友とし、自然を愛してきた民族だといわれもした。だが、私はそうは思わない。むしろ日本人は自然を精神的あるいは物質的に、私物化することに強い関心をもちつつけてきただけなのではあるまいか。自然の模倣としての日本庭園や盆栽・盆石などは、日本独自の美意識と伝統的技術に支えられながらも、結局は私物化された自然であり、それが一方で、公共の自然がそこなわれるときの鈍感なまでの無関心と奇妙に共存しているのをみると、そんな気がしてならない。

自然のとてつもなく長い生いたちと、その中で、人間の生活がいかに深く自然とかかわりあいを持ち、自然に支えられて発展してきたか、そして、その自然がどのような法則性のもとに成り立っているかを理解しなければ人間も自然の一員であるという認識の上に立った自然の大切さはわからない。自然保護や環境保全の基盤もここにある。

科学が技術に従属し、技術が資本に奉仕する。公害が頭をもたげてくるのは当然である。科学者は本当の意味のナチュラルリストに立ちかえらねばならない。科学教育はネイチャー・スタディから出発しなければならない。

現在、マスメディアの発達、自然の知識の普及に大きな役割を果たしているが、自然を理解するという点ではあくまでも補助手段である。石の堅さは自分自身がハンマーで割ってみないとわからないし、谷川の冷たさはその中に足を浸してみなくては感じとれない。写真や映像に描き出される森林では、木の葉っぱも裏返すことはできないが、自然の中では、その裏側に息をひそめてかくれている虫の姿を発見することもできる。自然を知る第一歩は自分自身の肌で感じ、眼で見ることだといえよう。

そこで博物館の使命は、ふだん自然に接する機会をもたない市民に、この自然と、整理された知識を提供することにある。そこには実物（標本）があり、いつでも気軽に訪れることができるわけだ。博物館の展示は、実物で自然の歴史性と法則性が語りかけられ、人間の生活の場としての自然の理解にたのしく引きづり込んでゆくものでなければならない。

同時に、大都市の博物館は、市民に、自然にしたしみ自然を肌で感じとる機会を提供しなければならない。そのために私たちはこれまで「親と子の自然を見る会」を数年間にわたって行ってきた。講習会や映画会などの教育活動に代って、野外に家族ぐるみで誘い出して、その中で自然を理解してもらおうのである。しかしこれには人数にも回数にも限度がある。いつでも手軽に自然にしたしむ場をもった博物館が大都市には欲しいものである。

一昨年来、われわれは東住吉区長居公園の中に二五ヘクタールの自然林植物園を造り、この中に自然史博物館を建設する準備を進めている。

大都市大阪にはすでに護るべき自然はすべて失われてしまったといって過言ではないだろう。私たちはこの自然林植物園の中に、大阪の自然をとりもどさねばならない。私たちの遠い祖先の生活を支えて来た照葉樹林をよみがえらせ、野鳥を住みつかせよう。私たちの祖先がつくった美しいクヌギ林もつくろう。その中で子供たちはカブト虫とりもできるだろう。草原では虫の声も聞けるだろう。池にはオタマジャクシの姿が見られ、赤トンボが水面をかすめて飛ぶだろう。

博物館の中では、みんなの身近かな自然、教科書に書かれた自然でなく具体的な大阪の自然の姿を通して、自然の歴史性と法則性を学ぶことができるし、市民の共有財産として自然の資料が大切に保管され、研究に教育に利用される。このような博物館・自然林植物園づくりとその発展を支えるのは研究活動であり、その成果を市民に返すことによって、研究はさらに発展し、また、自然保護の本質もさらに深く理解されてゆくのである。

自然保護はかって学術的に貴重な自然を護り、自然景観の美しさを保つ運動としてはじめられたが、現在ではわれわれ人間の生活の土台としてなくてはならない自然を、われわれの生命と共に何よりも大切にすることなのである。

I 庶務報告

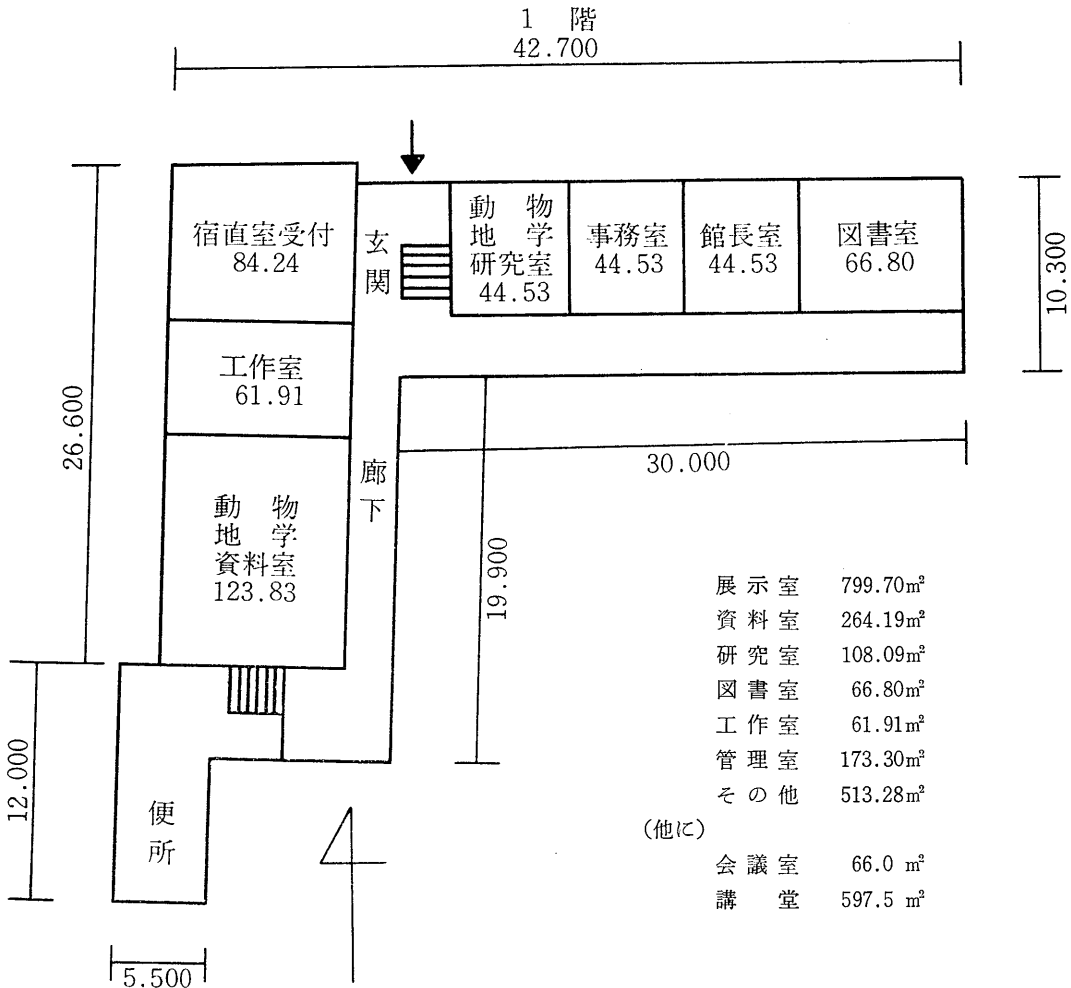
1. 沿革

昭和24年11月8日—自然科学博物館開設準備委員会設置
 昭和25年4月1日—自然科学博物館費予算に計上
 昭和25年11月10日—市立美術館2階廊下1部に展示開始
 昭和27年4月17日—博物館相当施設に指定
 昭和27年6月2日—大阪市立自然科学博物館条例および規則制定
 昭和27年7月10日—博物館法第10条により登録第2号
 昭和32年6月7日—市立美術館より現在地に移転
 昭和33年1月13日—開館
 昭和39年3月31日—市条例および規則改正現在に至る

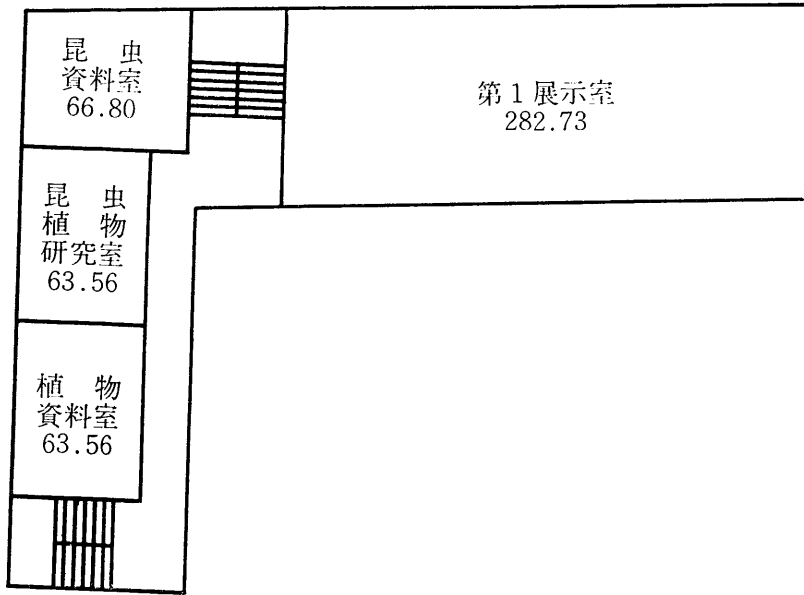
2. 現況

- (1) 所在地
大阪市西区靱2丁目52
- (2) 施設
敷地面積—2,401.79㎡
延床面積—1,987.27㎡
建築面積— 764.09㎡
- (3) 開館時間・入場料・休館日
開館時間—午前9時～午後5時
入場料—無料
休館日—毎週月曜日・毎月末日・国民の祝祭日
年末年始(12月28日～1月4日)
他に展示室の整備のため臨時休館することがある。

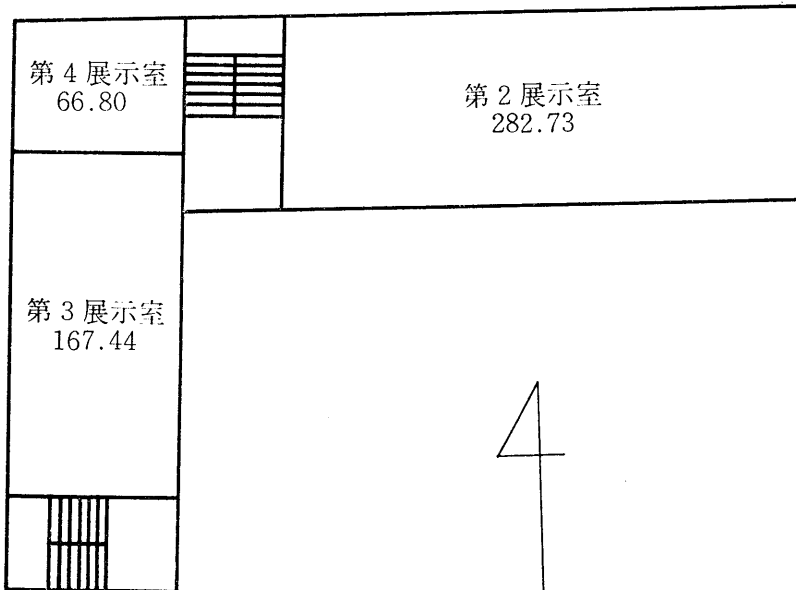
自然科学博物館平面図



2 階

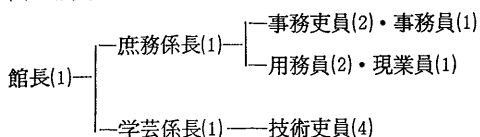


3 階



3. 職員および人事

(1) 職員の配置()内人数



(2) 職員名簿

館長	千地万造	(学芸係)
庶務係長	浮田哲	学芸係長 日浦勇
事務吏員	外嶋実	技術吏員 柴田保彦
事務吏員	渡辺幸雄	技術吏員 瀬戸剛
事務員	竹本婦美子	技術吏員 宮武頼夫

用務員 内本 光次 技術吏員 両角 芳郎
 用務員 大谷 春雄
 現業員 池田 昭利

(3) 職員の異動

ア. 異動(昭和45年4月1日～昭和46年3月31日)
 昭和45年4月21日 坂越謙次 庶務係長より東成区役所振興課主査に転出
 昭和45年4月21日 浮田 哲 建築局庶務課より当館庶務係長に就任
 昭和45年10月21日 岡本忠彦 当館庶務係より市教委体育課市民体育係に転出
 昭和45年10月21日 竹本婦美子 市教委庶務課より当館庶務係へ

イ 定数の推移

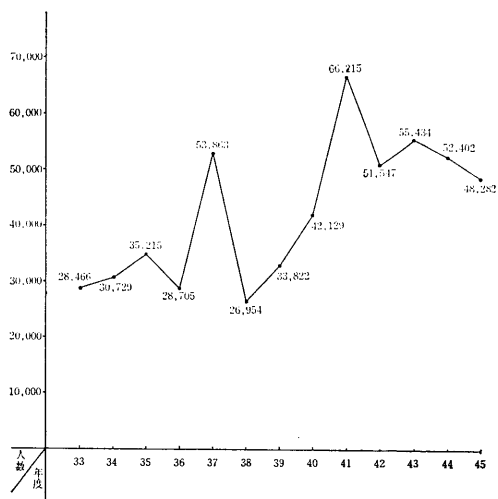
職種	年別												
	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
館長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
係長(主査)	(1)	(1)	(1)	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
事務職員	事務吏員	2	2	1	1	2	2	3	2	1	2	2	1
	事務員	1	1	2	2	1	1		1	1	1	1	2
学芸職員	技術吏員	4	4	4	3	3	3	4	3	3	4	4	4
	技術員	1	1	1	1	1	1						
業務職員	用務員	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	現業員						1	1	1	1	1	1	1
嘱託	2	2	2	2	2			1	1	1			
合計	14	14	14	14	14	13	13	12	13	12	13	13	13

4. 入館者

(1) 昭和45年度入館者数集計

種別	団体	幼児小学生	中学生	高校生	一般	合計	備考
4	249	1,152	338	109	1,706	3,554	
5	349	924	194	88	1,293	2,848	
6	756	835	212	108	1,073	2,984	
7	491	750	239	157	832	2,469	
8	283	1,309	528	218	1,240	3,578	
9	194	1,337	259	77	874	2,741	
10	1,279	5,662	469	203	3,087	10,700	
11	1,027	2,355	400	231	2,211	6,224	
12	1,228	583	180	176	682	2,849	
1	254	534	120	102	437	1,447	
2	3,032	670	120	134	536	4,492	
3	1,863	1,134	338	259	802	4,396	
合計	11,005	17,245	3,397	1,862	14,773	48,282	

(2) 入館者数年度別推移



特別展 (10/1～11/15) 入場者数 15,022人

5. 予 算

(1) 昭和45年度予算

歳 入	
博物館設備補助金	80,000円
雑収 (パンフレット売上げ代)	200,000円
合 計	280,000円
歳 出	
(1部)	
展覧事業費	1,363,000円
調査研究事業費	855,000円
資料収集保管事業費	1,197,000円

普及指導事業費	294,000円
整備充実費	975,000円
一般維持管理費	972,000円
小 計	5,656,000円
(2部)	
自然科学博物館整備費	1,000,000円
新館建設調査費	1,000,000円
小 計	2,000,000円
合 計	7,656,000円

但し人件費をのぞく。

(2) 予算年度別推移

(単位千円)

年 度	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
歳出予算											
第 1 部	3,283	4,260	4,243	4,193	4,171	3,463	3,345	3,827	4,160	4,347	5,656
第 2 部	170	5,000	600	0	150	1,000	1,000	1,310	1,500	1,730	2,000
合 計	3,453	9,260	4,834	4,193	4,321	4,463	4,345	5,137	5,660	6,077	7,656

6. 海外出張一覧表 (昭和33年度～昭和45年度)

行 先	期 間	氏 名	用 件
ニューカレドニア 及 属 島	昭和33年9月2日～ 昭和33年12月27日	筒井嘉隆 柴田保彦	メラネシア学術調査
ア メ リ カ	昭和36年8月17日～ 昭和36年10月2日	筒井嘉隆	第10回太平洋学術会議出席及アメリカ合衆国博物館視察
インド、セイロン 及 東南アジア	昭和38年12月10日～ 昭和39年1月19日	千地万造	第22回国際地質学会議出席及インド、セイロン、東南アジア博物館視察
東 南 ア ジ ア	昭和43年7月15日～ 昭和43年9月20日	波田重熙	大阪市立大学第5次東南アジア学術調査隊隊員として参加
フ ィ リ ピ ン	昭和44年6月29日～ 昭和44年7月15日	千地万造	フィリピン群島自然史調査
フ ィ リ ピ ン	昭和44年11月16日～ 昭和44年12月25日	日瀬勇剛 浦戸頼夫	フィリピン群島自然史調査
ア メ リ カ	昭和45年10月14日～ 昭和45年10月23日	千地万造	アメリカの博物館との標本交換交渉

Ⅱ 収 集 保 管 事 業

1 昭和45年度収集保管事業概要

(1) 地学部門 (3月5日現在)

ア. 購入標本

東洋象臼歯 (模型) 1点 日本地科学社
 世界各地のテクタイト 13点 日本地科学社
 水晶 (日本式双晶), 天青石他鉱物
 10点 真鍋鉱物研究所

イ. 主な寄贈標本 (一部交換を含む, 受入れ順)

三重県一志層群貝化石 多数 紀平 肇氏
 ローモンタイト結晶 2点 衣笠 弘直氏
 ベスブ石・螢石他鉱物 4点 後藤 慎介氏
 カンラン石玄武岩 1点 小畑 正明氏
 滋賀県鮎河層群貝化石 19点 樽野 博幸氏
 石灰洞穴の鉱物 3点 衣笠 弘直氏
 南極大陸の岩石 1点 大北 利雄氏
 鳥ノ巣石灰岩とサンゴ化石 2点 波田 重熙氏
 山口県大嶺桃の木産三疊紀大型植物化石
 3点 岡藤 五郎氏
 伊豆半島の火山弾と方解石 2点 池辺 展生氏
 硫砒銅鉱 1点 春日鉱山K.K.
 神戸層群産珪化木 1点 鈴木 昭司氏

ウ. 館員の採集出張と主な採集標本

資料収集・普及行事下見及び調査研究の目的で次のような出張を行い, それぞれ採集を行った。

(担当者C一千地, 無記号は両角)

5月22日 奈良県宇陀郡吐山 貝化石
 5月28日 兵庫県川辺郡多田銀山 鉱物
 6月2日 奈良市三笠山 岩石
 6月3日 滋賀県甲賀郡鮎河町 貝化石
 7月9日 滝ノ池 化石と普及行事指導
 7月12日 " " " " " "
 7月30日～8月3日 和歌山県串本町・印南町
 岩石と生痕化石
 10月5日～8日 静岡県掛川市周辺 有孔虫化石
 10月14日～23日 アメリカ合衆国 展示標本交換交渉。この時, 恐竜アロザウルスの爪とサーベルタイガーの牙を持ち帰った (C)。
 10月16日 奈良県榛原町 貝化石と行事下見
 12月20日 " 普及行事指導
 1月24日 " " " "
 2月1日～5日 岡山県津山市周辺 貝化石

エ. 資料交換のための海外出張

(ケ) 期 間 昭和45年10月14日～昭和45年10月23日

(キ) 行 先 a. Thomas Burke Memorial Washington State Museum, University of Washington. (シアトル)

b. Utah Museum of Natural History, University of Utah. (ソールトレーク)

c. Los Angeles County Museum of Natural History (ロスアンゼルス)

(ク) 目 的 新館建設に関し, 展示資料充実のためアメリカの博物館に対し, 当館所有のマチカネワニ化石複製標本と, 大型脊椎動物化石複製標本との交換を申し入れた。

(ケ) 結 果 a. ワシントン州立大学付属州立博物館とは, 大ナマケモノ化石の複製と等価交換することで意見の一致をみた。時期については未定。

b. ユタ自然史博物館とは, 当館が交換複製製作費用以内の実費でアロザウルスを製作委託する。時期未定。

c. ロサンゼルス博物館とは, ランチョ・ラ・ブレア産サーベル・タイガーの組立が出来次第交換するほか, 三崎竜頭部化石複製を実費でゆずり受ける。三崎竜頭部複製のゆずり受けは出来るだけ早い機会に実現の予定。

(2) 動物学部門

ア. 購入標本

毒蛇類標本 7点

イ. 主な寄贈標本

シンガポール産食用二枚貝 4点 粉川 昭平氏
 台湾産両生爬虫類 25点 大山 晃氏
 対馬産アムールカナヘビ 2点 桂 孝次郎氏
 マレーシアなどの両生爬虫類 11点 西川 喜朗氏
 白浜産アカウミガメ 1点 白浜観光協会
 小豆島産トカゲ 1点 樋出 誠詢氏
 カリマンタン産ヘビ 1点 長尾 耐而氏
 平戸産カナヘビ 1点 鴨川 誠氏
 宮城県金華山産両生爬虫類 9点 園部 力雄氏
 小笠原産両生爬虫類 8点 西平 守孝氏
 淡路産両生爬虫類 7点 桂 孝次郎氏
 道盛 正樹氏

ウ. 館員による採集

奄美大島・北海道大雪山 (IBP) の両生爬虫類標本。

(3) 昆虫学部門

ア. 購入標本

フィリピン産蝶標本	3点	
イ. 主な寄贈標本(一部交換を含む, 受入れ順)		
チビンデムシ科副模式標本	8点	林 靖彦氏
茨城・福島産蝶	11点	伊藤 良作氏
アフリカ産昆虫	5点	野村 英世氏
広島・奈良産昆虫	24点	土井仲治郎氏
山形県産トンボ・チョウ	40点	白畑孝太郎氏
トビナナフシの成虫・卵	6点	芳賀 和夫氏
沖縄・八重山群島産蝶	153点	東 清二氏
カシミール産蝶	42点	石井 健一氏
シロオビアゲハ	2点	桑原 英夫氏
北海道産カメムシ標本	86点	鈴木 雅弘氏
北海道産蝶	81点	鈴木 雅弘氏
山梨・静岡県産蝶	57点	北条 篤史氏
八重山産蝶	7点	多田 豊氏
パナマ産ウラニア蛾	3点	多田 豊氏
アリ	3点	上田 俊穂氏
キマダラルリツバメ等	4点	川村 脩一氏
ソヴィエト産蝶	130点	Mr. A. Tsvetajev
パラワン産昆虫	18点	本田 泰三氏
九住山産蝶・甲虫	15点	木船 悌嗣氏
中部地方産蝶	54点	北条 篤史氏
ゴミムシ標本	1点	土生 昶申氏
キヤムランジミ	2点	緒方 政次氏
ソヴィエト産蝶・蛾	72点	野口 好司氏
オオキンカメムシ	1点	東 輝弥氏
グンバイトンボ	1点	北川 一馬氏
ツシマウラナミジャノメ等	10点	黒沢 良彦氏
対馬・壱岐産昆虫	10点	桂 孝次郎氏
台湾産蝶	137点	張 保信氏
インド産蝶	8点	永井 正造氏
静岡県大井川上流産昆虫	29点	阿部 利一氏
ボルネオ産セミ	2点	北川 一馬氏
オオリボシヤンマ	1点	竹内 勉氏
オオギンヤンマ	1点	田中貴市朗氏
サラサヤンマ	1点	児玉 務氏
ニイジマトラカミキリ	2点	中田 隆昭氏
池田・箕面産昆虫標本	2点	上田 俊穂氏
ヒメバチ標本	1点	牛島弘一郎氏
トンボ・蝶標本	8点	一井 弘行氏
メガネサナエ	3点	津田 滋氏
南アフリカ産蝶	174点	Dr. J. Kaplan
荒神岳の昆虫標本	107点	後藤 光男氏
ブドウトラカミキリ	411点	奥野 孝夫氏
東南アジア産蝶・セミ等	76点	佐藤 正孝氏
マレーシア産蝶・セミ標本	31点	有田 豊氏
ヤエヤマムラサキ(迷蝶)	1点	横山 昭生氏
奄美群島産蝶	69点	栄 政文氏
シラミバエ標本	1点	滝川 洋幸氏
ヨーロッパ・中南米産トンボ	138点	井上 清氏
ブラジル産昆虫	6点	井上 清氏

ムカシトンボ	1点	五十嵐英二氏
対馬産昆虫標本	21点	浦田 明夫氏
台湾産昆虫	9点	大山 晃氏
ブラジル産トンボ	5点	井上 清氏
半翅類標本	5点	西川 喜朗氏
西パキスタン・アフガニスタン蝶	17点	有田 豊氏
徳之島産昆虫標本	44点	中村新次郎氏
韓国産蝶	76点	工藤 吉郎氏
イブリシジミ異常型標本	1点	五十嵐英二氏
南アフリカ産キジラミ標本	22点	Dr. A. L. Capener
茨木市産蝶標本	7点	竹内 勉氏
セミ幼虫標本	2点	桂 孝次郎氏
東京産トンボ	6点	宮崎 俊行氏
八重山産トンボ	13点	桑原 英夫氏

ウ. 館員による採集出張と主な採集標本

日本産昆虫の平均的収集, 大阪産昆虫の完全な収集および第四紀化石昆虫を集める目的で, 担当学芸員(日浦・宮武)が行なった出張は次の通りである。便宜上, 調査研究のための出張及び普及行事やその予備調査の際の出張も含めて記述する。(担当者名は, H-日浦, M-宮武, と略する)

45年 4月10日	京都市木津町九体寺	一般昆虫(H)
4月12日	奈良県月ヶ瀬	蝶の分布調査(H)
4月15日	和歌山県橋本市隅田	昆虫相調査(H)
4月17日	能勢初谷	一般昆虫(M)
4月19日	岸和田市(レンゲ畑)ハチ等	(H・M)
5月16・17日	和歌山市加太海岸	一般昆虫(H・M)
5月21・24日	奈良県生駒郡松尾山	一般昆虫(H・M)
5月31日	奈良県生駒町東山	蝶幼虫(H・M)
6月5・6日	京都府八幡	河原の昆虫相調査(H・M)
7月19日	京都府船井郡園部	一般昆虫(H)
7月20~25日	新潟県佐渡	昆虫相調査(M)
7月29日・8月9日	奈良県吉野郡大淀町	セミ等(H・M)
9月5日	堺市大浜公園	鳴く虫等(H・M)
9月12日	八尾市高安山	直翅目(H・M)
10月21・25日	和泉市光明池	トンボ等(H・M)
11月12・15日	能勢初谷	虫こぶ及び一般昆虫(H・M)
12月16日	京都府天王山	越冬昆虫(H・M)
3月7日	和泉市信太山	一般昆虫(H・M)

(4)植物部門

ア. 購入標本

ボルネオ産ウツボカズラ等熱帯植物標本 300点

イ. 主な寄贈標本

(ア)児玉コレクション 近畿地方産苔類標本約2万点
高槻市日吉台4番町2-4 児玉務氏寄贈

児玉務氏が約20年にわたって採集されたもので、その採集にあたっては、近畿地方全域にわたり、国土地理院の1/50地形図を「田」字形に4分し、その各区域に少なくとも1カ所は採集を行い、普通種にいたるまで、全種類を採集したものである。各標本には生育環境（標高、着生基物など）のくわしいデータが付されている。このように一地方を綿密に採集したコレクションは他に比類がない。すでにこの標本は近年続々発表された苔類各属のモノグラフに引用され、日本苔類分類学に貢献しているが、今後の研究にかかせない重要な資料である。新種発表の基礎となった Isotype もふくまれている。また、自然破壊のはなはだしい近畿地方で、今後このコレクションの果す役割は計り知れないものがある。

このコレクションの詳細は当館収蔵資料目録第3集として目下印刷中である。なお、児玉コレクションは全部で約4万点あり、残り2万点は来年度寄贈され、その内容は資料目録第4集として刊行される予定である。

(イ)中島コレクション 日本産コケ植物標本約3万点
岸和田市南上町328-1 中島徳一郎氏寄贈

中島徳一郎氏が約40年にわたって採集されたもので、おもに近畿地方の蘚類標本であり、前述の児玉コレクションと相まって、近畿地方の蘚苔両方が揃い、コケ植物のまとまったコレクションとなる。

児玉コレクションと同様、多くのモノグラフに引用され、学術上の価値が高い。目下、新調の標本戸棚に整理中で、将来、当館所蔵資料目録の一冊として、その内容が報告される予定である。

(ウ)米沢コレクション 日本産種子植物・シダ植物標本約5,000点 大阪市東住吉区平野住吉町48 米沢新治氏寄贈。

米沢新治氏が大正時代から引続いて採集された標本で埋立てられてしまった水草の宝庫巨椋池や、すっかり破壊されてしまった大阪湾海岸の採集品など、今日では、もはや入手できない標本をふくみ、昔日の大阪を物語る貴重な資料である。目下、整理中。

ウ. その他寄贈標本

静岡県産スギラン (河内 清採集)	1	上田 俊穂氏
堺市別所産アケボノシュスランなど	2	有馬 忠雄氏
生駒暗峠産ツリフネソウなど	2	平田 稔治氏
長野県木崎湖産ヒメミズニラ	1	岡原 勝氏
小豆島産ノキシノブ奇形葉	1	樋出 誠詢氏
桜塚高校栽培トネリコバナカエデ	3	長尾 和栄氏
植物標本	13	村田 源氏
奈良県下市産ヒメカンアオイ	1	大籾 恵子氏
長崎県五島産植物標本	6	木下 慶二氏
大阪府泉南地方植物標本	3	中西 定雄氏
鹿児島県霧島産ヒメテンナンショウ	1	桑島 正二氏
山梨県産ウスバサイシン	1	三枝 豊平氏

和歌山県大塔山産コウヤシロカネソウ

	1	生田 耕蔵氏
鹿児島県甕島産ヤクシマシュスラン	1	吉年 祐一氏
屋久島および京都府産シダ植物	43	井上 康彦氏
植物標本	5	上田 俊穂氏
近畿地方産苔類標本	12	建部 恵潤氏
北海道産アカエゾマツ球果など	5	柴田 保彦氏
エチオピア産地衣類	1	辻本 修氏
和歌山県高野山産など植物標本	23	桑島 正二氏
大阪府泉南郡産など植物標本	19	中西 定雄氏
兵庫県産ホテイシダなど	4	道盛 正樹氏
隠岐島産植物標本	4	吉年 祐一氏
エゾデンダなど隠岐島産植物	2	丸山 巖氏
和歌山県産植物標本	6	山元 晃氏
三重県産ヨウラクラン	1	桂 孝次郎氏
岐阜県産シダ植物	2	生田 耕蔵氏
富士市産カナウツギなど植物標本	2	御影 雅幸氏
植物標本	15	中島徳一郎氏
菌類標本	25	上田 俊穂氏
キイレツチトリモチなど沖縄産植物標本	13	吉年 祐一氏
京都府産イノデ類などシダ植物標本	16	生田 耕蔵氏
菌類標本	2	上田 俊穂氏
高槻市出灰産カツラ	2	渡辺 昇氏
ボルネオキナバル産シダ植物	50	佃 泰幸氏
大阪府産など植物標本	36	桑島 正二氏
シムライノデなどシダ植物	2	志村 義雄氏
北海道産植物	50	吉年 祐一氏
植物材標本	50	真鍋 鶴松氏
近畿地方産植物標本	44	児玉 務氏
近畿地方産苔類標本	11	道盛 正樹氏
北海道大雪山産コケ植物標本	21	西川 喜朗氏
台湾・香港産植物標本 (おもにシダ植物)	20	井上 康彦氏

エ. 交換標本

フィリピン産シダ植物	85点	
M. Price, Dept. Botany, Univ. Philippines, College Agriculture.		日本産シダ植物と交換
ルイジアナ産植物標本	250点	
R. Dale Thomas, Dept. Biology, Northeast Louisiana Univ. U. S. A.		日本産植物と交換
オ. 館員の採集出張		
10月4日 姫路市大塩海岸		
10月18日 和歌山県日高郡日高町阿尾		
10月28日 奈良県宇陀郡室生村西谷		
(5) 万国博覧会による主な寄贈標本		
ア. チリの岩石・鉱物	6点	Chilean Pavilion
イ. クジャク石等ソ連邦産鉱物	15点	Yuri Orlov
(これは万博のため来日していたソ連科学アカ		

デミー鉱物博物館のオルロフ氏が帰国後送って
くれたもの。今後交換できるようにしたい。）

ウ. ヘラシカの剥製 1頭
British Columbia Pavilion
エ. シベリア産木材標本 16点 USSR Pavilion
(*Abies sibirica*, *Abies parvifolia*, *Pinus*
silvestris, *Quercus mongolica*, *Phellodendron*
amurensis, *Betula verrucosa* の樹皮つき木材
標本)

2 現有資料数

(1) 地学部門 (3月5日現在 登録済み) (前年の同期との比)		
化石	4,288	(+ 152)
微化石	13,700	(+ 200)
岩石	743	(+ 13)
鉱物	1,394	(+ 60)
大阪地下の化石	956	(+ 0)
計	21,081	(+ 425)

(2) 動物学部門

哺乳類・鳥類	約 390点
両生・爬虫類	約 3,900点
魚類	約 2,300点
貝類	約 7,200点
甲殻類	約 1,800点
その他海産動物	約 1,600点

(3) 昆虫学部門

標本数総計	110,026点
	(日本産 77,150, 外国産 32,876)
内 訳:	昭和45年 45年3月から
日本産昆虫	2月まで 46年2月末まで

Orthoptera 直翅目	1,746	35
Grylloblattoidea コオロギモドキ目	4	0
Blattaria ゴキブリ目	83	2
Phasmida ナナフシ目	50	8
Mantodea カマキリ目	85	10
Dermaptera 革翅目	116	2
Poscoptera チャタテムシ目	64	5
Isoptera 等翅目	5	0
Odonata トンボ目	1,956	100
Heteroptera 異翅亜目	14,123	160
Homoptera 同翅亜目	4,126	33
Neuroptera 脈翅目	77	19
Mecoptera 長翅目	337	43
Rhopalocera 蝶	11,501	538
Heterocera 蛾	1,525	50
Coleoptera 鞘翅目	25,137	609
Hymenoptera 膜翅目	3,194	22
Diptera 双翅目	3,169	26
水生昆虫(禿翅目・毛翅目等)	354	5
その他一般昆虫(各目)	6,869	962
計	74,521	2,629
計	77,150	

昭和45年 昭和45年3月から
外国産昆虫 2月まで 昭和46年2月末まで

蝶	13,102	667
蛾	475	72
甲虫	364	7
異翅亜目	0	12
同翅亜目	581	65
トンボ	0	147
その他	43	2
粉川氏台湾産昆虫コレクション	200	0
東太平洋学術調査隊収集品	4,700	0
田中龍三氏コレクション	12,439	0
(日本産を含む)		
計	31,904	972
計	32,876	

(4) 植物部門

種子・シダ植物おしぼ標本	42,500
セン類標本	32,000
タイ類標本	22,000
地衣類標本	300
海ソウ標本	300
菌類標本	150
計	97,250

3 文献交換状況

昭和45年度(厳密には45年2月12日から、46年2月28日現在まで)に交換・受贈により受入れた雑誌類の冊数は下の表の通りである。前年度に比べて受入れ冊数が増えているのは、従来より当館の印刷物を送付している機関へ質疑アンケートを配布して国内外とも文献交換の正常化をはかったのと、新しく交換先を増した為である。

年 度	受入れ冊類	冊数の累計
昭和44年度	1,866	19,530
昭和45年度	2,636	22,166

4 当館研究報告の配布状況

当館発行の“大阪市立自然科学博物館研究報告第23号(Bulletin of the Osaka Museum of Natural History No. 23)一昭和45年発行一は、676カ所に配布された。その内訳は、国内245カ所、国外68カ国431カ所である。国外発送分のうち、アメリカ合衆国・イタリア・オーストラリア・オーストリア・オランダ・スイス・スウェーデン・スペイン・チェコスロバキア・デンマーク・西ドイツ・東ドイツ・ニュージーランド・ノルウェー・ハンガリー・フィンランド・フランス・ベルギー・ユーゴスラビア・ルーマニアの20カ国は、国立国会図書館を經由して送付し、他の諸国へは直送した。なお、国内外の配布先のうち286カ所を選んで、研究報告とともに、“自然史研究” Vol. 1, No. 4~No. 5 をも送付した。

Ⅲ 調 査 研 究 事 業

1 研究体制

当館では、地学・動物学・昆虫学・植物学の4部門に各1名の専門学芸員が配置されているにすぎない。したがって研究活動のみならず、資料収集・教育活動面においても種々の支障があり、かつ市民の要望にも応えにくい。学芸員の増員をつねに要望しているが、45年度中に実現しなかった。

スタッフ

千地万造 (CHIJI Manzo)	地学
両角芳郎 (MOROZUMI Yoshiro)	地学
日浦 勇 (HIURA Isamu)	昆虫学
宮武頼夫 (MIYATAKE Yorio)	昆虫学
柴田保彦 (SHIBATA Yasuhiko)	動物学
瀬戸 剛 (SETO Ko)	植物学

2 総合調査

天然記念物緊急調査

大阪府教育委員会文化財保護課よりの依頼で、大阪府の天然記念物緊急調査（文化庁の企画で全国的に行われている）のうち、120万動植物図と同解説書を作製した。これは120万植生図と対をなし、この方は大阪府立大学造園教室が担当した。外部から日本野鳥の会々員岡田康稔（哺乳類・鳥類）・真下弘（鳥類）の二氏に参加頂き、瀬戸（植物）・柴田（爬虫・両生・魚類）・宮武（昆虫）・日浦（昆虫・とりまとめ）の計六名が行った。依頼のあったのが45年8月で、以後特別展の準備・新館計画等の都合で着手できず、結局11月下旬より46年2月末までの間に、計7日の野外調査と6回の会合でとりまとめざるを得なかった。将来自然保護に役立つよう、“天然記念物に相当する学術上価値を有する生物及び生物群集”の所在と構成の明示に主眼を置いて地図及び解説書を作製し、府を通じ文化庁に提出した。

3 個別調査研究事業

千地万造（地学）

(1) 「日本の海岸平野形成過程に関する総合研究」(文部省科研費・総研A・代表者歌代勤)の研究分担者として、有孔虫群集による海岸平野形成層の環境推定に関する研究を行った。

(日本地質学会第76年学術大会・シンポジウム「海岸平野」資料集 p.75-81)

(2) 「日本の新第三系の生層序区分と絶対年代による国際的対比」(文部省科研費・総研B・代表者池辺展生)の研究分担者として、日本の新第三系の浮遊性有孔虫化石による生層序について考察した。とくに池辺展生(大阪市立大学)と共同で、伊豆半島・下白

岩の湯が島層群模式地の試料中の浮遊性有孔虫化石群を検討し、その地質時代およびそれに関連して、日本における *Lepidocyclina* (*s. l.*) と *Miogyopsina* の生息期間について従来の説を再検討した。

(Journal of Geosciences, Osaka City University, vol. 14, Art. 2, p. 19-52, 印刷中)

両角芳郎（地学）

- (1) 瀬戸内地域中新統の貝化石群集に関する研究
前年度に引きつぎ岡山県津山盆地の貝化石群集の調査を行った。
- (2) 総合研究「日本の新第三紀の生層序区分と絶対年代による国際的対比」の研究分担者として、掛川層群の浮遊性有孔虫による生層序区分の研究を行った。10月にサンプリングを行い、12月に処理を終え、現在9割の拾い出しを終了しているが、まだまとめる段階には至っていない。引きつぎ来年度もこの研究を続行する。

柴田保彦（動物学）

- (1) 北海道大雪山調査
北海道の高山での、両生爬虫類の垂直分布と食物連鎖上の位置を調べるため、7月に大雪山を調査した。これは昭和45年度文部省特定研究「陸上脊椎動物群集の構造の比較とその保護に関する研究 (JIBP-CTS)」の研究分担者として行った。結果は45年度 JIBP-CTS 年次報告に「大雪山地域の両生爬虫類相」として報告した。
- (2) 北海道天売島・焼売島の調査
両島の両生爬虫類相を調査した。特にカナヘビの地理的変異について調べた。
- (3) その他。小笠原産爬虫類の分類学的研究などを行った。

宮武頼夫（昆虫学）

(1) 日本産キジラミの分類と生活史の調査—近畿地方の調査はのべ7回、専らこれまでに収集した標本を室内で研究するのに時日を費した。

7月には佐渡へ出張し、一般昆虫の採集のかたわら、23種のキジラミの生息を確認し(全て同島より新記録),記録発表した(当館研究報告 No.24, 印刷中)。

10月、福岡での日本昆虫学会大会において、オオトガリキジラミの分類学上の問題と生活史について講演した。

I B P の担当者からの依頼で、大雪山で smoking により採集されたキジラミの同定も行った。

(2) 外国産キジラミの分類研究—九州大学農学部安松京三教授の採集になる山西省学術探検隊の採集品の中から、キジラミ類の標本を借用していたが、研究を完了し、5属16種を記録発表した(投稿中)。又、名城大学農学部昆虫学研究室から借用した、韓国産のキジラミ標本を調べ、3属8種(新記録を含む)を発表した(当館研究報告 No. 24, 印刷中)。

フィリピン・台湾をはじめ、他の地域の標本については、研究続行中である。

(3) 天然記念物緊急調査—12月から開始したので、昆虫にはシーズンオフであったが、高槻樫田・能勢町天王〜上山辺・泉南郡岬町などの調査に参加し、昆虫相を考察する上での基礎資料を得、又、いささかの標本も得ることができた。

日浦 勇(昆虫学)

(1) 日本列島生物相発達史。この問題を考究するための材料と現象への着眼点を論じた「日本列島における種分化と“第四紀的”環境」を哺乳類科学20・21号(徳田御稔先生退官記念号)に発表(pp.51~59, 1970)。

(2) 日本産チョウの分類地理。「日本産蝶の分布系統」を蝶と蛾(日本鱗翅学会創立25周年記念論文集)に投稿、また日本昆虫学会昭和45年大会の「現代生物学と種の問題」シンポジウムで生物地理学の立場から「*Pieris* 属の historical biogeography」という話題提供をした。

(3) フィリピン群島蝶相の生物地理。44年度に行ったフィリピン群島自然史調査の第1報としてアゲハチョウ科をとりまとめ Bulletin に投稿。

(4) 近畿地方におけるオサムシ分布の史的成立過程。信楽山地のマヤサンオサムシの亜種分化論を Bulletin に投稿(桂孝次郎氏と共同研究)。

(5) 昆虫化石の研究。照来層群の昆虫化石中、カゲロウ目幼虫をとりまとめた(鳥取県立智頭農林高等学校の衣笠弘直氏と共同研究)、未発表。

瀬戸 剛(植物学)

フィリピン産シダ植物の分類学的研究

昨年度行ったフィリピン群島調査(館報3参照)の採集品の研究を継続

4 研究業績一覧

(Contributions from the Osaka Museum of Natural History)

業績番号 研究者“表題”, 発表誌, 巻号:頁(発表年)

147. 千地万造・紺田功“日本海北部奥尻島周辺の底質中における有孔虫群集の深度分布について”, Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 23: 35-50, pls. 7-10 (1970)

148. 柴田保彦“隠岐より新しく記録されるシロマダ

ラ、並びに日本におけるシロマダラの分布とその由来についての考察(爬虫類・ヘビ類)”, 自然史研究, 1(5): 35-44 (1970)

149. 日浦 勇“日本産蝶の分布系統”, 蝶と蛾, (21) suppl.: 16pp.

150. HIURA, I. “Discovery of *Apotomopterus* from the Japanese Neogene”, SHIZENSHI-KEN-KYU, 1(6): 45~50(1971)

151. KUWAYAMA, S. & Y. MIYATAKE “Psyllidae from Shansi, North China. (Hemiptera)”, (投稿中)

152. HIURA, I. & R. E. ALAGAR “Studies on the Philippine Butterflies collected chiefly by the Natural History Survey of the Philippines by the Osaka Museum of Natural History in co-operation with the National Museum of the Philippines, I: Papilionidae”, Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 24: 25-40, 4pls. (1971).

153. 日浦 勇・桂孝次郎“信楽山地のマヤサンオサムシ”, Ditto, 24: 13-24 (1971)

154. MIYATAKE, Y. “On some species of Psyllidae from Korea (Hemiptera: Homoptera)”, Ditto, 24: 1-4 (1971)

155. BABA, K. & Y. MIYATAKE “Notes on Psyllidae from Sado Island, Niigata Prefecture (Hemiptera: Homoptera)”, Ditto, 24: 5-12 (1971)

156. TANI, K. “A revision of the family Lepidostomatidae from Japan (Trichoptera)”, Ditto, 24: 41-66 (1971)

157. IKEBE, N. & M. CHIJI “Notes on top-datum of *Lepidocyclina sensu lato* in reference to Planktonic Foraminiferal Datum”, Jour. Geosci., Osaka City, Univ., 14 (2): 19-52, 4pls. (1971) (他に)

柴田保彦“JIBP主調査地、石鎚山地域の動物相調査報告—IV。石鎚山地域の両生爬虫類相とくに爬虫類の食性と垂直分布について”, “陸上生態系における動物群集の調査と自然保護の研究。昭和44年度研究報告:37-45 (1970年3月)

上野俊一・柴田保彦“対馬の爬虫両生類相小記”, 国立科学博物館専報。3: 193-198。(1970年10月)

IV 展 覧 事 業

1 常設展

特別展準備のために9月21日から第2, 3, 4展示室を閉鎖したが、それまでは各展示室とも基本的に44年度の展示を引き継いだ。

特別展終了後、第4展示室は直ちに常設展を復活させ、第2, 3展示室は「琉球列島の生物」展終了後、若干の展示替えを行い、1月から常設展に加えた。特別展終了後の各展示室の特徴を記せば次のとおりである。

(1) 第1展示室

主に化石の展示室にしてある。従来ものから大阪層群の化石を整理のため引き上げ、その分だけ、大阪地下の化石(特に貝化石)を増やした。

(2) 第2展示室

植物の展示を第3展示室へ移し、そこへ、タカアシガニ、サンゴ、シヤコなど海の生物を展示した。それに、毒ヘビの展示、万博ブリティッシュコロンビア館からいただいてきたムース(ヘラジカ)を熊石洞から発掘したヘラジカやオオツノジカの化石と対応させた展示を新たにつけ加えた。

(3) 第3展示室

大阪におけるモンシロチョウの分布をはじめとする昆虫の展示、大阪の土地利用図と帰化植物を中心とする植物の展示を行った。

(4) 第4展示室

ほぼ従来どおりの、岩石と鉱物の分類展示を行った。

2 特別陳列

(1) 琉球列島の生物展

11月21日～12月27日

琉球列島は熱帯アジアと日本をつなぐかけ橋であり、南方から日本へ生物が渡来する通路にもなっている。そこに住む多様な亜熱帯生物は、生物愛好家をひきつける魅力をもっている。近畿大学農学部生物研究会が行っている琉球列島の生物調査の成果の発表の場として、この展覧会をもち、日本に帰ってくる豊かな自然を紹介した。会期中2回、スライド上映と解説が行われた。(主催・近畿大学農学部生物研究会)

主な展示内容—植物(シダ・種子・マングローブ)・チョウと食草・迷蝶・トンボ・甲虫・クモ・毒ヘビ・貝・岩礁性動物・昆虫の生態など。

(2) 玄関入口の展示

玄関入口正面に展示ケースを作りつけ、時々に応じたテーマの展示を行って、展示室への導入にしている。

5～6月 大阪のカエル(13種全部)

7月 カンボジアのチョウ

8～9月 テクタイトと衝激ガラス

10～11月 東南アジアのチョウ(特別展の導入)

12月 琉球列島の昆虫

1月～ ウラジロの形とくらし

(3) 大阪市立婦人会館での展示

婦人会館一階ロビーに当館の展示ケースを1つおき、当館の紹介を兼ねて展示を行っている。

5～6月 地衣類

7月 ササとタケ

8～12月 大阪の赤トンボ

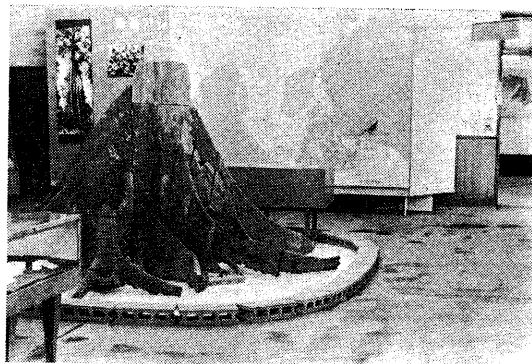
1月～ 大阪にも恐竜がやってくる(アメリカから当館におくられてくることになったアロザウルス、サーベルタイガー他の化石の紹介)

3 特別展

(1) 昭和45年度特別展(第8回特別展)

ア. タイトル: 東南アジアの自然

イ. 趣旨: この展覧会は昭和44年11月～12月にかけて当館が行ったフィリピン諸島の自然史調査の成果を発表する場として、その時の採集品をはじめ、東南アジア各地のチョウやカブト虫、貝、ヘビ、シダ、ヤシ、スパイスなど、それに日本で見られる熱帯起源の生物などを展示し、熱帯の多様性と同時に、東南アジアと日本の生物学的・地史的なつながりを追求しようというものであった。



東南アジアの自然展

ウ. 期間: 昭和45年10月1日～11月15日

エ. 会場: 博物館3階の第2展示室西半分と、第3, 第4展示室をこれにあてた。

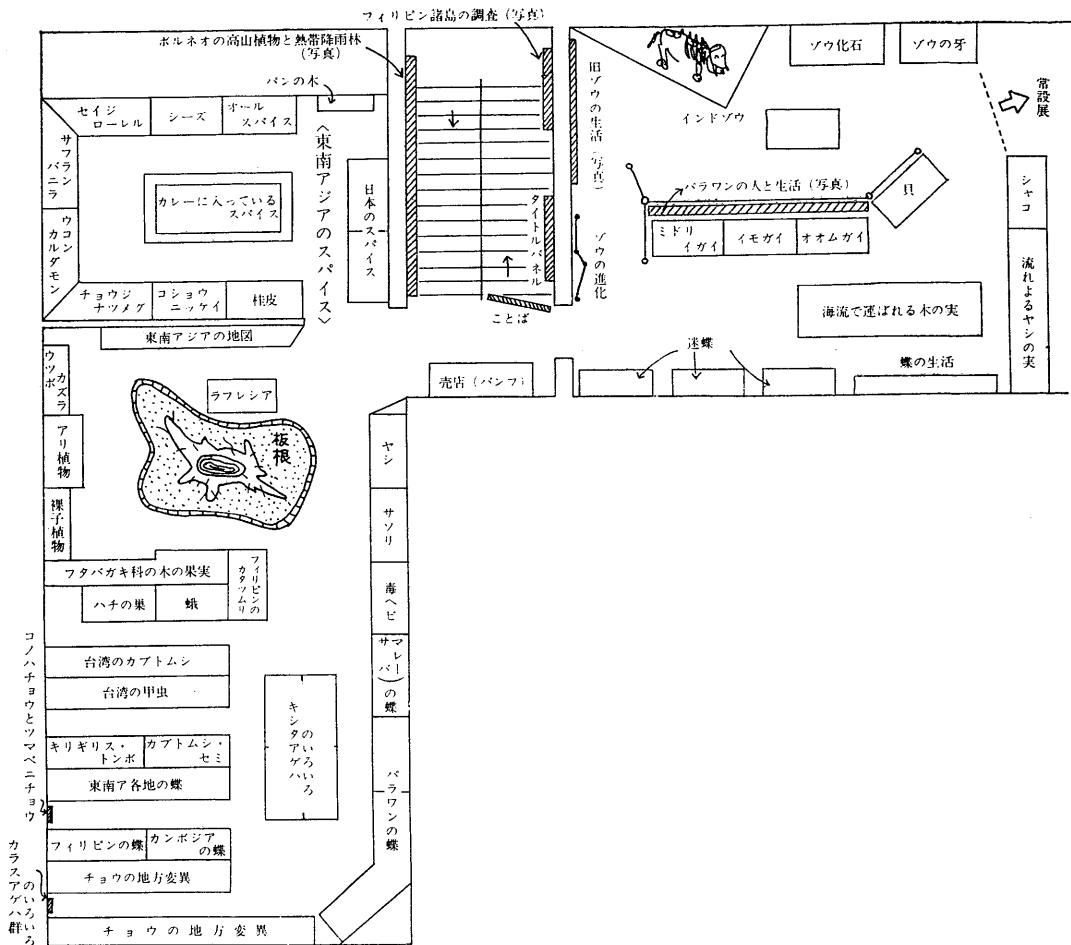
オ. テーマ: 3つの展示室に次のようなテーマを設置して、単なる珍しい羅列に終らないよう配慮した。

東南アジアと日本

象のきた道

海流と海の生物

日本にある熱帯の植物



東南アジアの自然展見取図

風と昆虫 (迷蝶を中心として)

東南アジアの自然 (昆虫と植物を中心として)

東南アジアとスパイス (植物の利用)

カ. 出陳内容: 会場見取図を参照のこと。

キ. パンフレット: 「東南アジアの自然」2色刷24ページを刊行した。その他に記念スタンプと記念絵葉書 (トリバネアゲハ・オオカブトムシ・テナゴガネ・ワニ・ウツボカズラのカラー5枚セット) も作成した。

ク. 入館者数: 15,022人 (団体1,760人, 一般4,696人 大学73人, 高校241人, 中学773人, 小学生7,479人)

評価: 東南アジアと日本の自然的つながりを強調したことにより, そういう目で見てもらうという効果はあった。しかし, 東南アジアの自然という大きなテーマの中から, 昆虫, 植物など, 限られたものしか扱えなかったため, 期待してきたものが展示されていないという不満

を持った人もあるようである。又, 予算の関係から, 説明パネルのかなりの部分が博物館員の手書きになったため, 多少スッキリしない部分もあった。

4 特別展一覧表

回	年度	タイトル	会期	会場
1	37	世界の蝶展	10/2~10/30	博物館
2	39	鳴く蟲展	9/1~ 9/13	"
3	40	淀川・びわ湖の生物展	10/1~10/20	"
4	41	化石展	10/1~11/15	"
5	42	貝の世界	10/1~10/31	"
6	43	世界の蝶・日本の蝶	3/1~ 4/27	"
7	44	鉱物展	8/6~ 8/12	阪神デパート
8	45	東南アジアの自然展	10/1~11/15	博物館

V 普及指導事業

例年参加希望者が多く消化しきれないため、全市小学校へのピラ配付をやめ、市内小学校を3ブロックに分け全市周知は、3カ年間で行きわたるようにした。博物館の普及活動も15年目を迎え、自然に深く親しむ人々も多く育ち、常連の参加者も数多く、研究発表にも立派なものがあり、普及活動の成果はあがっている。そこで、そのような人々に、より高度に自から進んで学習してもらうために、自然科学研究会へ入会するよう勧めるとともに、自然科学研究会の受け入れ体制として、研究会主催の普及行事の開催回数を増し、博物館と共催とした。

1 親と子の自然をみる会

学校教育では不足がちな、実験・観察を通して身をもって学ぶという態度を習得させるため、親ともども、観察・接触のヒント・方向性を与え、方法を教える。しかし体験・発見は個人ですべきものであるから親と子どもが、同一事象について話し、相談し、協力して観察し、疑問を大切に育て、解決を試みる努力から創造性を身につける。親も子どもと共に観察をつづけることによって自然界の事象に接して“ものの見方”を学んでもらいたいのである。この目的達成のため親と子の自然をみる会を開催している。本年度も、年度当初に全市小学校のうち3ブロックの1地域の小学校(4・5・6年児童)に5万枚のピラ(注1)を配付するとともに、大阪市政だより、館内掲示により、年間行事案内をだした。詳しい案内通知を望む家庭は、館・普及係に10枚のハガキを預けさせたが、その数は約1,100家族を越した。行事案内をその預りハガキで行い、参加を望む家庭は、往復ハガキにて申し込んでもらった。参加希望者が多く「チョウの子どもさがし」や「岩石さいしゅう」のように同行事を二度催したり、定員を増せる行事は定員の枠をはずしたりし、申し込み家族の望みに応えようと努力したが、1家庭平均3回位の参加にとどまり、多くの家族を失望させた。しかし、これ以上の増回は、新館問題もルールがしかれた今、学芸員の人手不足と旅費不足が重なり不可能である。

2 大阪自然科学研究会・博物館共催行事

参加資格を研究会会員に限り催し、45年度は10回と回数大幅に増し、自から自然の中に飛び込み学習する意欲をおつけて、身をもって体得してもらった。

3 一般成人向行事

大阪層群見学会、シダ植物講習会、コケ植物講習会の3回にとどまった。周知方法を教員向けとして学校への文書、一般向けとして、商業新聞を通じてPRしたが、地質見学会については、教員が参加数の大多数をしめ、難解な場所であったが、講師の説明を理解してもらえた。植物講習会については、教員が約1/4で、過半数を一般社会人がしめた。また、昨年までは植物学的に勉強し

ようという人が多かったのだが、今年は、自分の庭や幹栽とする植物を採りに来たという人が多く、過去の講習会参加経験者はわずかに4名と少なく、新しい層が開拓できたとはいうものの、今後のPRの方法を始めとし、行事の性格等の再考が必要と思われる。

(注1)

はくぶつかんの
《親と子の自然をみる会》

自然科学博物館では、小学校4・5・6年生とお父さん、お母さんが、いっしょに自然かんさつをする集りを、今年10回ひらきます。

4月 レンゲ畑のかんさつ	9月 なく虫かんさつ
5月 チョウの子どもさがし	10月 赤トンボとり
6月 川原の生物をみる	11月 木の葉と虫おさがし
7月 岩石さいしゅう	12月 冬の鳥をみる
8月 セミのかんさつ	1月 化石さがし

この集りに参加したい家庭は、次をよく読んでください。

- ★毎回のくわしい案内は、直接ハガキで家庭へ知らせます。(新聞・ラジオ・テレビ・学校への通知などではいっさいしません)。通知を受けたい家庭は、ハガキを10枚、博物館にあずけて下さい。ハガキは10枚とも、裏に自分の住所・氏名をはっきり書き、まづ封筒に入れ、博物館普及係宛郵送して下さい。
- ★観察会のくわしい通知が毎月あなたの家にとどいたら、よく読んで、参加したい時だけその態度あらためて往復ハガキで申込んで下さい(往復片に行事名・参加希望者全員の氏名・年齢・住所を記入)。
- ★希望者が少いときは全員参加できますが、多ければ抽選で決め、当選者だけが観察会に参加できます。当選は往復ハガキの返信片で知らせます。
- ★児童は単独で参加できません。父又は母とかならずいっしょに来ること。

大阪市西成区2-52
大阪市立自然科学博物館
(電話 441-6900)
西区うつは公園の南、なほ橋さい、地下鉄四つ橋線本町14平、西へ5分
月曜、月未祝日休み、**入場無料**



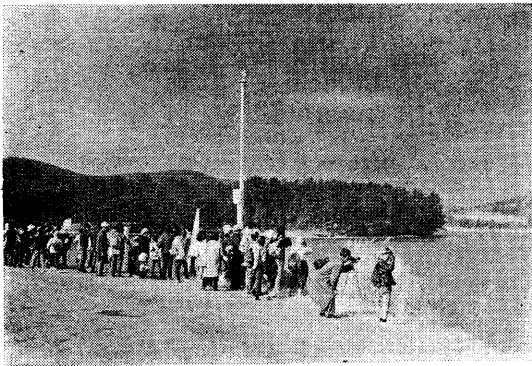
①



②



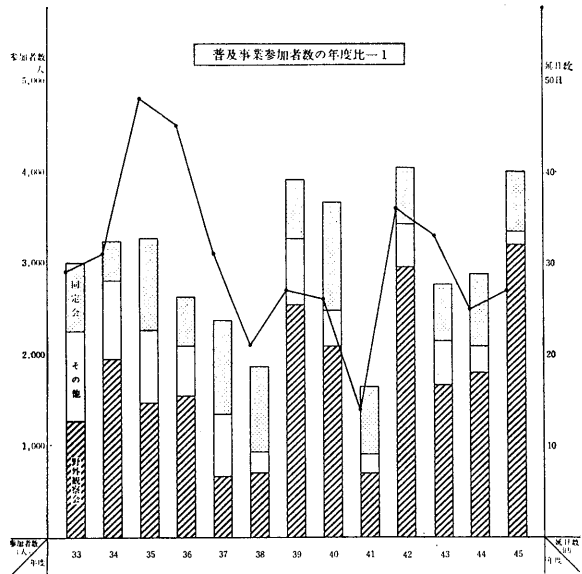
③



④

写真説明

- ① 昭45.12.6 動物の冬ごしかんさつ
- ② 昭45. 8.30 標本同定会
- ③ 昭45.12.20 化石さがし
- ④ 昭45.12.13 冬の水鳥をみる



普及事業参加者数の年度比-2

行 事		年 度												
項 目		33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
野外観察会	回 数	12	13	13	21	7	10	14	15	8	20	19	15	21
	延 日 数	15	20	18	27	8	13	17	20	11	27	24	16	22
	参加者数	1,263	1,954	1,475	1,546	675	710	2,540	2,088	704	2,953	1,665	1,801	3,202
映画・その他講演	回 数	12	10	15	16	8	7	6	5	2	6	5	3	4
	延 日 数	13	11	29	17	22	7	9	5	2	8	8	8	4
	参加者数	985	854	791	540	669	224	723	391	207	459	484	289	145
標本同定会	回 数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	延 日 数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	参加者数	750	427	995	536	1,024	935	646	1,183	742	628	620	785	654
計	回 数	25	24	29	38	16	18	21	21	11	27	25	19	26
	延 日 数	29	31	48	45	31	21	27	26	14	36	33	25	27
	参加者数	2,998	3,235	3,261	2,622	2,368	1,869	3,909	3,662	1,653	4,040	2,769	2,875	4,001

昭和45年度普及行事一覧表

月/日	行 事 名	場 所	外部講師	定員	申込数	参加数	備 考
4/19	レンゲ畑のかんさつ	岸和田市土生			153組	85組 210人	親子の自然をみる会①
4/25	講演とスライドの会 「ソ連邦の鉱物資源とモスクワ博物館」	科学技術センター				75人	大阪自然科学研究会—1
5/17	磯あそび	和歌山加太海岸			138組	93組 260人	” —2
5/24	チョウの子どもさがし(1)	松尾山西麓			483組	124組 326人	親子の自然をみる会②
5/31	” (2)	”				184組 453人	” ③
6/ 7	川原の生物をみる	京都八幡町 三川合流点	1	100組	381組	71組 285人	” ④
6/14	ブナ林を歩く	金剛西斜面			[雨天中止]		大阪自然科学研究会—3
7/ 5	地質見学と岩石さいしゅう(1)	泉佐野市長滝	1	100組	307組	36組 82人	親子の自然をみる会⑤ 台風接近のため参加者減
7/12	” (2)	”	1			73組 216人	” ⑥
7/25	映画とスライドの会	科学技術センター				8人	大阪自然科学研究会—4
8/ 9	セミのかんさつ	吉野大阿太ナシ園	1	50組	152組	23組 55人	親子の自然をみる会⑦ (朝まで雨が残っていた)
8/15	昆虫採集会				台風9号 [雨天中止]		大阪自然科学研究会—5
8/25 ~26	シダ植物講習会	岩湧山		50人	21人	17人	一般成人対象
8/30	標本同定会	自然科学博物館	20			324件 654人	
9/ 5	なく虫かんさつ	堺市大浜公園			30組	140組 59組 165人	親子の自然をみる会⑧
9/12	虫の声をきく会	高安山				29組 50人	大阪自然科学研究会—6
10/ 4	大塩塩田の生物かんさつ	山陽電鉄大塩				32組 13組 30人	” —7
10/18	特別展説明見学会 「東南アジアの自然」	自然科学博物館				14組 32人	” —8
10/25	アカトンボさいしゅう	和泉市光明池		100組	188組	74組 196人	親子の自然をみる会⑨
11/ 1	太子丘陵の大阪層群見学会	太子丘陵	1		71人	80人	一般成人対象
11/ 8	動物園でケモノをみる会	天王寺動物園				11組 30人	大阪自然科学研究会—9
11/15	木の実と虫こぶさがし	能勢初谷	1	50組	186組	36組 99人	親子の自然をみる会⑩
11/29	コケ植物講習会	高槻市川久保	2		199人	112人	一般成人対象
12/ 6	動物の冬ごしかんさつ	山崎天王山				57人	大阪自然科学研究会—10
12/13	冬の水鳥をみる	小野市来住の池	4	50組	96組	23組 53人	親子の自然をみる会⑪
12/20	化石さがし	奈良県榛原				72人	大阪自然科学研究会—11
1/24	化石さがし	”	3	100組	176組	119組 305人	親子の自然をみる会⑫
3/ 7	早春のハイキング	信太山				79人	大阪自然科学研究会—12
計						4,001人	

上記行事のほか、普及活動として、口頭、文書、電話による質問の応待(約4,500件)。学校、各種研究団体、民間会社等への講師派遣(35件)。大阪自然科学研究会

(会員1,1000名)の指導と育成をすると同時に、同会発行の普及誌(月刊)Nature Study (Vol. 16, No. 4~Vol. 17, No. 3)の編集を行った。

Ⅵ 新 館 建 設 事 業

昭和33年に自然科学博物館が開館して以来、基本的運営方針として、調査研究、資料の収集保管、展示、教育活動を4本の柱として博物館活動を実施してきたが、建物自体大正13年に建てられた小学校校舎を博物館に改造したものに設備も不十分であり、老朽化も激しく、博物館活動を行なう上に種々支障をきたしている。さらに近年急激な都市化に伴い市民の自然に対する関心が高まり、教育機関としての利用が増加したので、展示内容の飛躍的な充実と施設の近代化、野外見学その他の教育活動の増大が市民および学生層から強くのぞまれている。また現在所蔵の豊富なコレクションの中には、世界的な学術価値をもつものも多く含まれており、これらの安全な保管とともに、近年急激に失われつつある自然の資料の収集、研究が学界、教育界、報道機関等からも強く要請されている。これらの要望に応えるために昭和44

年度より調査費を計上し、昭和45年度には基本計画をまとめ、この基本計画に基づいて予算要求を行い全体計画（3年継続事業）として7億7千万円の新館建設事業が予算化された。

そのうち46年度事業費は1億円である。

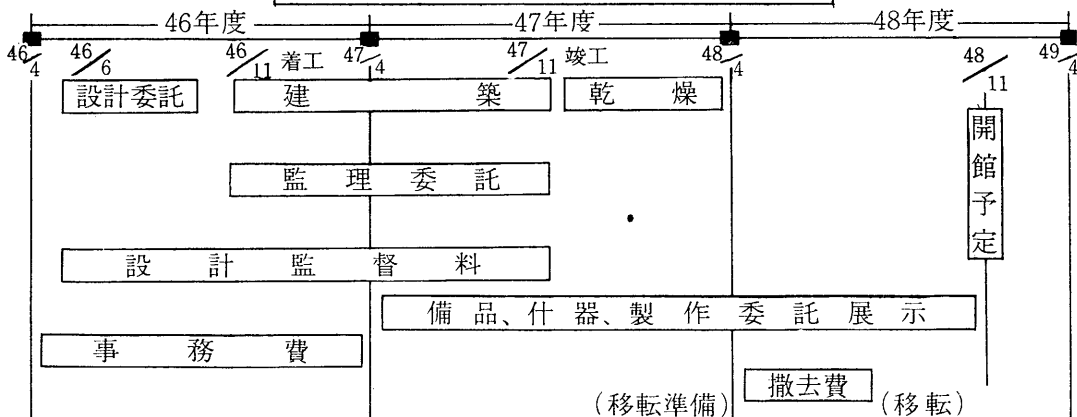
- | | |
|----------|---------------------------|
| 1 名 称 | 大阪市立自然史博物館 |
| 2 建設予定地 | 東住吉区長居公園有料地区（自然植物園）内 |
| 3 規模構造 | 延 6,000㎡ 鉄筋コンクリート造
3階建 |
| 4 建設費 | 7億7千万円（46年度事業費1億円）含事務費 |
| 5 工 期 | 昭和47年1月～昭和47年12月 |
| 6 開館（予定） | 昭和48年11月 |

自然史博物館建設予算

（単位 千円）

内 訳	年度別				内 訳	年度別			
	全体計画	44～45	46	47以降		全体計画	44～45	46	47以降
建設工事費	630,000		73,000	557,000	事務費	150		150	0
本体工事	375,000	}	73,000	557,000	内部設備費	70,000			70,000
設備工事	255,000				調査委員会費	1,300	1,300		
建設に伴う事務費	31,350		27,000	4,350	撤去費	36,350			36,350
設計委託	18,420		18,420	0	移転費	1,000			1,000
監理委託	10,180		7,430	2,750					
設計監督料	2,600		1,000	1,600	計	770,000	1,300	100,000	668,700

自然史博物館建設行程表



（備考） ●基本設計 46年5月末完成 ●実施設計 46年6月より ●仮契約 46年9月上旬
●市会46年10月 ●着工46年11月



ANNUAL REPORT

of the

Osaka Museum of Natural History

for the year

1970

Utsubo Park, Nishi-ku, Osaka, 550 Japan.
